

〔そのとき、エルサレムに戻った二人の弟子は、〕道で起こったことや、パンを裂いてくださったときにイエスだと分かった次第を話した。こういうことを話していると、イエス御自身が彼らの真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。彼らは恐れおののき、亡霊を見ているのだと思った。そこで、イエスは言われた。「なぜ、うろたえているのか。どうして心に疑いを起こすのか。わたしの手や足を見なさい。まさしくわたしだ。触ってよく見なさい。亡霊には肉も骨もないが、あなたがたに見えるとおり、わたしにはそれがある。」こう言って、イエスは手と足をお見せになった。彼らが喜びのあまりまだ信じられず、不思議がっているので、イエスは、「ここに何か食べ物があるか」と言われた。-ルカ24章-

『あなた方に平和があるように』

聖書は、自我による墮罪によって樂園を閉ざされた人類が、樂園に戻ることに許されたとき、その道に迷わないための「虎の巻」です。それなのに、無知な私たちは、その虎の巻はそっちのけで、自分の思いで行きたい道を歩んでいるのは由々しいことです。

聖書が指摘する私たちの「無知」とは、自分の自我、欲望が優先されて、聖霊の勧めに気づけない心です。命への導き手である方を殺しても、その人間の悪をも善に変えて、救いを実現しようとなさる、いつくしみの神様の心が私たちの腑に落ちれば、人は以後、決して神様を裏切ることは出来ない人になるのですが、そうならないのは、私たちの無知の闇の深さ故でしょうか！？

無知故に命を奪おうとする者に、命を与えて逝った主が、敗北人生のどん底で沈んでいた弟子たちに現れて、与えた平和は、世が目指す「勝ち組の中にある」ものではなくて、『心の中に神がいる』平和だったのです。

子供のころ、母から諭された言葉を思い出します。五歳の弟が、喧嘩で投げた石が相手の頭に当たって大変なことになった事件でした。その夜、八人の子供を集めて言った母の言葉は「これから、もし外で喧嘩したら、うちの子は必ず泣いて帰ってきなさい。」「泣いて帰ってきた子はその日の晩、枕を高くして足をまっすぐ伸ばして眠ることが出来る」と。母の「弱い方を選べ、そして心を選べ」という戒めは今も消えることはありません。

20数年前ルアンダの民族大虐殺事件で、3か月間トイレにかくまわれて生還した少女イマキュレーは、一家を殺害した囚人との面会で、そのことを言うためにここまで来たそのことを、静かに言いました。「あなたを許します」立ち会わせた解放軍の兵士は激怒して彼女に「どういうことなんだ！イマキレー。あいつは、君の家族を殺したやつなんだぞ。あいつに尋問するためにここに引っ張ってきた。もし君が望めばつばを吐きかけてやれるように。それを許すだと！どうしてそんなことが出来るんだ。なんで許したりするんだ」トイレの中で神に出会った彼女の返す言葉は「許ししか私には彼に与えるものはないのです」でした。



「私についてモーセの律法と予言者の書と詩編に書いてある事柄は、必ずすべて実現する」とイエスが言われた山上の変容の時のあの出来事、モーセとエリアとイエスが話しておられた、ルカが記す「最期の時(=エクソダス)」の内容は、悪の支配下にあるこの世からの脱出の計画でした。その方法、樂園に戻る道は、自分の自我に死ぬ「十字架の道」だったのです。